# 留学経験者像とアイデンティティ交渉

## ―日本人留学経験者のインタビューおよび会話データの談話分析―

稲葉皐（大阪大学大学院生）

## 1. はじめに

「留学」とは，外国に「移動」し，現地での生活を通して異国の文化に触れ，様々な価値観を持つ人々と交流するものとされている．このことから，近年グローバル人材の育成を目指し，文部科学省や大学等の機関で日本人学生の留学が推進されている．一方で，日本社会では「英語を流暢に話す」ことや「ポジティブ思考」が留学経験者の特徴であると考えられており，これらは「海外かぶれ」として嘲笑やからかいの対象となっている．特に，YouTube や TikTok などのメディアの登場でその傾向は激化したと言ってよい(稲葉，2024)．そこで本発表は，留学経験者たちの語りの中で，アイデンティティの交渉に注目し，彼女たち自身が持つそれぞれの「留学経験者像」の相違と，帰国後の葛藤を明らかにすることを目的とする．本さらに，留学経験者たちが彼女たちの言語使用について語っている場面や，帰国後に取っている行動に対して意味づけを行なっている場面を分析し，当事者たちが実際に留学を経験して変化したアイデンティティの一端を示すことを目指す．

## 2. アイデンティティと留学経験者

Beinhoff & Rasinger(2016)は，社会言語学におけるこれからのアイデンティティ研究は，特定の社会的・文化的行為と一連の自己を遂行する「アイデンティティの流動性」について，グローバル化などの要因により複雑に変化する世界で，相互行為の中で行われるアイデンティティの交渉や構築を研究することが必要であると示唆した．

新型コロナウイルス感染症の影響により，一時はその数が著しく減少した留学経験者数であるが，近年は徐々にその数が増加している．日本人学生支援機構(2024)によると，令和 4 年度(2022 年)地域別・留学機関別日本人留学生数は 58,162 人であり，前年の 10,999 人よりも増加していた．また，１ヶ月未満の留学先は 11,006 人とアジアが多く選ばれおり，次いで北米(7,034 人)，欧州(6,419 人)，大洋州(3,445 人)となっている．一方で，６ヶ月以上の留学先は北米（６ヶ月以上１年未満：4,133 人・１年以上：749 人）が欧州（６ヶ月以上１年未満：3,220 人・１年以上：93 人）となり，次いでアジア（６ヶ月以上１年未満：1,939 人・１年以上：291 人）となっている．また，飯野(2022：269)では，留学は「そこにしかないもの，それが最高なもの，という固有の価値を求めて，わざわざコストと時間をかけて移動し，滞在すること」とされ，コロナ以後の現地に赴く留学についてまとめている．他にも，留学経験者に関する研究は，現地に赴く留学がもたらす語学力の向上や，異文化コミュニケーションの態度等を明らかにする研究が行われている（吉村・中山，2010；八島，2012；Nwosu，2022;）．

上述のように，留学はその期間や場所などにさまざまな種類がある．また，海外勤務者等の子供で海外に一定の期間在留し，帰国した帰国子女と混同される場合がある．日本学生支援機構によると，留学とは，「海外の大学等における教育又は研究等の活動及び，学位取得を目的としなくても単位取得が可能な学習活動や，異文化体験・語学の実地習得，研究指導を受ける活動等，海外の教育機関（あるいはそれに付属する機関）と関連して行われる各種プログラムへの参加」を指す．よって，本研究で扱う留学経験者は，大学等の教育機関に在籍し，上記のような留学プログラムや海外の大学に一定の期間在籍した人物であると定義する．また，岩崎(2018；2022)は，留学という移動の研究として，日本留学を行なっていた「ハーフ」の参加者や(岩崎，2018)，幼少期から移動の経験を持つ参加者(岩崎，2022)を対象に，留学がもたらしたアイデンティティの変容や，言語学習や使用に関するイデオロギーを言語ポートレート[1]とその語りを通して調査した．しかし上記の先行研究は，日本人留学経験者同士の相互行為を分析したものではない．そのため，本研究は実際に留学を経験した日本人同士の談話の中で観察されたアイデンティティの交渉場面に着目する．

[1]参加者が「身体の線画に自分のことばを位置付け好きな色で描いたもの(岩崎，2018：22)」．

## 3. 理論的枠組みと研究方法

### 3.1 相互行為的社会言語学

相互行為的社会言語学は,「会話のインタラクションを解釈する際に,人々がコミュニケーションを行うときに使う手がかりに特に注目（岩田・重光・村田 2021：184)」する.アメリカの社会言語学者であるGumperzは,コンテクストは単なる状況ではなく,ある発話をどう解釈したらよいかを判断するための枠組みであると考えた.特に,Gumperz(1982)は,異なる文化的背景を持つ人々間における相互行為を例に,コンテクストを理解するための共通の枠組みや,「コンテクスト化の合図」を理解できなかったために起こった誤解やミスコミュニケーションを分析している.このように,相互行為を中心とする談話を分析する際には,相互行為で生起していることのみならず,参加者の背景や彼ら／彼女らが持つ社会文化規範等もコンテクストの一部として分析する必要がある.本発表もこの相互行為的社会言語学の考え方を参考に,個人の相互行為によってやりとりが協働構築・再生産される過程に注目する.

### 3.2 分析データ

本研究の分析対象データはZoomを通じて録画された17名の日本人留学経験者および留学未経験者のインタビューと会話場面を記録しているものである.研究協力者は「留学経験の話を聞くインタビューと会話場面の録画」という目的で募った.また,研究協力者にその知り合いを紹介してもらい,一緒に調査に参加をお願いした.データ録画時には,まず研究倫理を説明し,研究参加への同意を得た上で留学経験を聞くインタビューを行った.その後,調査者が Zoom のカメラを切り,退出したところで,研究協力者同士での会話場面を録画した.参加者には事前に研究目的とデータの扱い方を共有し,同意を得た上で Zoom ミーティングを設定した.また,録画の開始部分で再度研究目的と研究倫理について説明し,直接同意を得た.本発表で扱うデータは,2024年1月6日に収録した1時間20分47秒のインタビューおよび会話データから抜粋する.参加者は,フィンランドに2022年8月から2023年1月まで留学したえまと2022年8月から2023年6月まで留学したはるかである.参加者と筆者はデータ収集日に初めて顔を合わせた.調査協力者の基礎情報は表1に示す.

**表1　調査協力者の基礎情報**

| 名前（トランスクリプト名） | 所属・学年 | 留学先 | 留学期間 |
|---|---|---|---|
| えま(E) | 大学4年生 | フィンランド | 2022年8月～2023年1月 |
| はるか(H) | 大学4年生 | フィンランド | 2022年8月～2023年6月 |
| 調査者(SI)[2] | 大学院生 | アメリカ | 2018年8月～2019年5月 |

## 4．分析結果および考察

本発表では,Zoom 録画開始後に行ったインタビューからの抜粋をデータ 1 として,フィンランド留学を経験した参加者たちが抱く留学経験者像に注目して分析を行う． データ 2 では,調査者退席後に開始した,留学経験者同士の会話場面開始直後から始まった「帰国後の生活」について話している箇所を抜粋する.

### 4.1 留学経験者像の変化

データ1の抜粋1では,調査者の質問に対して,6行目でえまがターンを取り,留学前後で変化した留学経験者像を語りはじめた.留学前のえまは,「インターナショナルスクールに通って(8行目)」おり,「英語がペラペラ(10行目)」で,「すでに海外の友達がたくさんいる(12-13行目)」という留学経験者像を持っていた.しかし,えま自身は,実際の留学経験者は「そんなに海外経験がな(16 行目)」い人物であると考えていることがわかり,彼女が持つ留学経験者像が留学後に変化していることがわかる.さらに,えまは笑いながら続けて,「¥インターナショナルスクールの人たちみたいな人が,¥(23行目)」「フィンランドには意外と少なかった気がし(24行目)」たと述べた.すなわち,留学前にえまが想像していた留学経験者は,実際の留学先にはあまりいなかったのである.また,留学経験者は「英語がペラペラである(10 行目)」と考えていたえまは,彼女自身が英語を流暢に話すことができるようになったことは否定しながら,日常を英語で送っていたた

**抜粋1　えまのインタビュー**

```
006.   E:     なんか私は結構. (.) 留学する前までの留学経験者のイメージが::
007.           (0.4)
008.   E:     結構. .h なんか, (0.2) インターナショナルスクールに通ってて,
009.           (0.5)
0010.  E:     ¥英語ペラペラで::,¥
0011.          (0.6)
0012.  E:     なんかすごい. (0.4) もうすでに海外の友達が
0013.          たくさんいるような. (0.6) イメージだったんですけど,
0014.          (0.3)
0015.  E:     実際, (0.2) 行ってみたら:: 結構. 私と同じように
0016.          そんなに海外経験がなかったり::
0017.          (0.9)
0018.  E:     なんか.
0019.          (1.1)
0020.  E:     そうですね.
0021.          (1.4)
0022.  E:     >なんかこの< 私が思ってた::
0023.          ¥インターナショナルスクールの人たちみたいな人が,¥
0024.          フィンランドには意外と少なかった気がしました.
(13行省略)
0037.  E:     日常を英語で送ってたりしたので:::.
0038.          ふとした瞬間に:: (.) 英語しか出てこなかった[り,
0039.  SI:                                                  [う::ん
0040.          (0.8)
0041.  E:     なんかちょっと,なんか気持ち悪い状態には一瞬なりました
0042.  SI:    ¥気持ち悪い状態.¥
0043.  E:     @@@ [@
(12行省略)
0056.  E:     [特にバチェラーとか] マスターとか,そういう,
0057.          (0.3)
0058.  E:     なんか (0.2) あっちでよく使ってた言葉は:::
0059.          (0.4)
0060.  E:     こっちでもカタカナみたいな感じで
0061.          言っちゃったりはしま [した.
0062.  SI:                          [あ::::,
```

[2] 調査者は大学3年生のときにアメリカの私立大学に交換留学をした経験があり,インタビューの中では自身の留学経験を話すこともあった.

め，ふとした瞬間に英語しか出てこなかったことがあり(37-38 行目)，それは「気持ち悪い状態(41 行目)」であったと述べた．また，留学先でよく使用していた単語をカタカナの発音で日本語の会話に使用していることに言及した(56-61 行目)．

また，えまの語りの後にはるかが話した場面である抜粋2 では，留学前のはるかは，留学経験者は帰国後に「めっちゃポジティブ(81 行目)」になると考えており，このような状態を「まじほんと． ¥留学経験↑者::¥．(83 行目)」と笑いながら評価した．そして，このような態度が「前面に出て(89 行目)」おり，留学経験者は「ポジティブにしか生きられません(93 行目)」という人物像であったと考えていた．しかし，留学後はこの考えに変化が生じ，実際の留学経験者となったはるか自身を含め，逆カルチャーショックを受けるなど(99 行目)，「葛藤が多い(103 行目)」人物であると新たに考えるようになった．このことから，留学前の二人が持っていた留学経験者像は，海外の友達かいることや「ポジティブ(81 行目)」な態度をとるなど，外向的な人物像であった．また，「英語がペラペラである(10 行目)」など，その言語使用に関連するステレオタイプが存在していたことが見て取れる．一方で，実際に留学を経験した 2 人の留学経験者像は変化していた．このことから，彼女たち自身が持っていた留学経験者像と実際の留学経験に乖離を感じ，その認識が変化していることがわかる．さらに，はるかも留学後の自身の言語使用に変化が生じたことを自覚している．はるかは英語力が伸びたことは実感しているが，自身が「バイリンガル(117 行目)」になったことは否定し，「逆に日本語も衰えて(121 行目)」，「語彙力が (0.3) ¥すごい減(123 行目)」ったと考えていることが見て取れる．このような日本語の使用について，はるかは片言や日本語の文法構造を逸脱した言葉遣いとして「google トランスレート使ったみたいな日本語(132 行目)」を時々話し，それが自身の中で「ショック(143 行目)」であったと述べた．このように，参加者は二人とも留学を経験した自身の言語使用について変化を感じ，それに対して否定的な評価を付与したことが明らかになった．

**抜粋2　はるかのインタビュー**

```
0080.  H:     .h 最初は私は留学経験者のイメージがこう，
0081.         すごい．(.) もう．帰ってきたらめっちゃポジティブで，
0082.         (0.3)
0083.  H:     まじほんと．¥留学経験↑者::¥．¥みたい[な¥
0084.  SI:                                          [¥あ¥
0085.  H:     [@@@@]
0086.  SI:    [@@@]
0087.  E:     [@@@]
0088.         (0.5)
0089.  H:     ¥前面に出てる¥
0090.  SI:    ¥わかりますわかります.¥
0091.  H:     @@
0092.         (0.7)
0093.  H:     もうポジティブにしか生きられません．¥みたいな¥
0094.         (0.3)
0095.  H:     ¥イメージがあったんですけど.¥
0096.         (0.4)
0097.  H:     ま,自分を含め，逆に.
0098.         (0.2)
0099.  H:     逆キャル- カルチャーショックみたいなのを
00100.        (0.4)
00101. H:     やっぱ．(0.4) 今うけ- 受けることも多いので::
00102.        (0.5)
00103. H:     意外に ¥葛藤が多いんだな,留学[経験者って¥
00104. SI:                                  [あ:::
00105. H:     .h 思いました
00106.        (0.6)
00107. SI:    あ::: すごい．(.) 留学経験者にね．なったからこそわかる．
(7 行省略)
00115. H:     あと,やっぱ,
00116.        (0.2)
00117. H:     言葉も:::．(0.3) バイリンガルになりました．とかもなく,
00118.        なんなら::,
00119.        (0.5)
00120. H:     .h 英語は:: ま伸びたのかもしれないんですけど,
00121.        逆に日本語も衰えて,
00122.        (0.4)
00123. H:     語彙力が (0.3) ¥すごい減りました.¥ hh
(8 行省略)
00132. H:     そうですね．なんかgoogle トランスレート使ったみたいな
00133.        日本語時々使ってしまうこともあって,
00134.        (0,5)
00135. H:     .h
00136.        (0.2)
00137. SI:    カタコト
00138.        (0.4)
00139. SI:    なんかよくわかんない順番になったりとか?
00140.        (0.4)
00141. H:     hh
00142.        (0.6)
00143. H:     それ,すごい自分の中で．¥ショック[でした.¥
00144. SI:                                    [@@@
```

## 4.2　帰国後の葛藤と日本社会の矛盾

データ 2 は調査者が Zoom 上で画面を切り，退出した後すぐに開始した会話場面において，えま留学を経験して他の国に住むことに抵抗感がなくなったと述べた後から始まる(抜粋 3)．海外に行き，そこで生活することへの抵抗感を感じなくなっているえまは，「日本が嫌というか， また別のところに(217 行目)」「住みたいなって思ったら，(218 行目)」「行動に移すかもしれない．(220 行目)」と述べ，海外に住みたいと思うようになった場合，それを実行することを示唆した．これを聞いたはるかは，224 行目で「なんか:: 向こうに行った方が::」とターンをとり，「向こう」である海外で生活すると，自身は「マイノリティ(228 行目)」となり，自身の存在を肯定する態度を取ることが可能であると考えていると分析できる．このことに対して，えまは 231 行目からターンを取り，「外国人であるっていうのが，めっちゃ楽なんよな．(233 行目)」と述べ，228 行目の「マイノリティ」を「外国人」と言い換えながら，外国人として生活することが「楽」であるとはるかの意見に賛同した．はるかは 235 行目から 236 行目でえまの発言に同意し，「あんまり気にされない感じ」がすると，他人の目や存在を気にせずに生活できると述べた．また，はるかは，留学先では「マイノリティ」として生活したことを「人の目も気にせず，(240 行目)」「なんでもできた気が(242 行目)」したと述べた．しかし，帰国後は自身の「ネガティブな癖(252-254 行目)」と前置きしながらも，「ちょっと人の目を(255 行目)」「気にし始めるようになった(257 行目)」と語った．これに対してえまははるかの発言に重なるように理解を示している．

**抜粋3　留学中と帰国後の自分**

```
00215. E:     まあ,もう日本が,
00216.        (0.8)
00217. E:     日本が嫌というか，また別のところに
00218.        住みたいなって思ったら,
00219.        (1.1)
00220. E:     行動に移すかもしれない.
00221.        (0.7)
00222. H:     う::ん
00223.        (0.6)
00224. H:     なんか:: 向こうに行った方が::
00225.        (0.5)
00226. H:     あもう，なんか.
00227.        (0.6)
00228. H:     マイノリティですが何かみたいな感じの (.) 態度で,
00229.        (0.4)
00230. H:     [(          )
00231. E:     [私もあの:::,
00232.        (0.4)
00233. E:     外国人であるっていうのが,めっちゃ楽なんよな.
00234.        (0.2)
00235. H:     そう．なんか，あんまり気にされない
00236.        感じが [して.
00237. E:            [そうそうそうそう
00238. H:     すごい
00239.        (0.7)
00240. H:     な- 人の目も気にせず,
00241.        (0.6)
00242. H:     もうなんか,なんでもできた気が
00243.        (0.4)
00244. H:     したんだけ[ど,
00245. E:               [hhh @@
00246. H:     逆にこっち帰ってきて,
00247.        (0.5)
00248. H:     なんか.
00249.        (0.6)
00250. H:     またちょっと:: こう．(.) まあこれはなんか,
00251.        (0.8)
00252. H:     いや,私にとっては結構ネガティブな::
00253.        (0.3)
00254. H:     癖というか,感じかもしれないけ↑ど.
00255.        ま，そういう．ちょっと人の目を
00256.        (0.2)
00257. H:     気にし始めるようになった [かな,
00258. E:                              [わかる,
```

抜粋 4 は，抜粋 3 に続き，えまが「人の目を気にするようになった」例として「服装」のストーリーを語った場面である．えまは留学先での服装を「あんまり気にせんかった(268 行目)」が，帰国し，日本では「流行とかもあるし(276 行目)」見た目を「逆にまた気にするようになった(292 行目)」と付け加えた．はるかもえまのストーリーに再度同意を示し，人の見た目を気にする態度を「変:: に．(.) 自意識過剰みたいな:(292 行目)」と評価していることが見て取れる．また，それが「¥嫌だな:: みたいな.¥(300 行目)」と，笑いながら述べていることも観察された．一連のやりとりの後，留学経験者たちは笑い(302, 303 行目)，帰国後の自身のふるまいを再確認していた．

この一連の会話では，データ 1 のインタビューで参与者たちが述べた「留学経験者の特徴」に当てはまるような語りが行

われていることがわかる. もともと留学経験者は外向的であるというイメージを参加者たちは持っていた. しかし, 実際に留学を経験し, そのイメージと自分自身は乖離していると考えていることが抜粋 1 と 2 で明らかにされた. 一方で, 抜粋 3 と 4 に見られたように, 外国で生活することに抵抗感を感じず, むしろ「マイノリティ」や「外国人」として生活することは, 他人の目を気にすることなく日々を送ることができると留学経験者たちは考えている. このことから, 彼女たちの留学経験や帰国後のふるまい, 考え方は「ポジティブ」であるのではないかと考えられる. しかし, このようなポジティブな行動やふるまいを留学経験者は「気にする」ようになったと述べ, この態度は「自意識過剰(292 行目)」であり「嫌(300 行目)」でもあると考えている. つまり, 留学で培った外交的で「ポジティブ」な考え方を日本社会での生活では自制しようとする矛盾を抱えているのではないかと考えられる. また, 留学経験者たちが語りの中で同意を示し合っているように, このアイデンティティの葛藤を共有していることがわかった.

**抜粋 4　自意識過剰**

```
00265. E:      めっちゃ,人の目気にするようになった. なんか,
00266.       例えば服とかも:, あっちで::
00267.       (.)
00268. E:    全く,あんまり気にせんかったわけよ.
00269.       (0.2)
00270. H:    うんうん.
00271.       (0.2)
00272. E:    探していければいいみたいな感じで::
00273.       (0.5)
00274. E:    思ったんやけど,
00275.       (0.7)
00276. E:    こっちだと,やっぱ,なんか,流行とかもあるしさ.
00277.       (0.2)
00278. H:    うんうん
00279.       (0.5)
00280. E:    そういう, なんやろう,
00281.       (1.5)
00282. E:    見た目と↑か.
00283.       (0.3)
00284. H:    うん,
00285.       (0.2)
00286. E:    は,
00287.       (0.7)
00288. E:    逆にまた気にするようになったかも.
00289.       (0.7)
00290. H:    うん. なんか::
00291.       (0.3)
00292. H:    変:: に. (.) 自意識過剰みたいな::
00293. E:    うんうんそうそう
00294. H:    感じの:.
00295.       (1.1)
00296. H:    には, なんかなって. すごい,
00297.       (1.7)
00298. H:    あ::,なんか.
00299.       (0.6)
00300. H:    ¥嫌だな:: みたいな.¥
```

## ５．結論と今後の課題

留学では, 外国で生活し, 様々な経験を通して新しい価値観を獲得することができる. 本発表の会話データ参加者たちは無自覚であるかもしれないが, 彼女たちの留学経験が留学前に持っていた留学経験者像である帰国後の「ポジティブ」なふるまいにつながっているとその語りから考察できる. しかし, 帰国後に人目を気にする彼女たちは, 留学で得たアイデンティティを日本社会の規範に合わせようと実践している. このことは, 他人の評価という視点から, 自己を監視し, 主体的に行動させる力に従う留学経験者として考察できるのではないだろうか. また, やりとりの中でお互いの状況を認識し, 留学経験者たちは同意形成を行うことで, そのふるまいの実践を正当化しているのではないかと考えられる. 本発表では, 留学経験者たちが帰国後の考え方や言語使用, ふるまいについて葛藤する姿を共有する場面を分析し, 例の提示や経験の共有を通して, 彼女たちが留学経験者としての自己アイデンティティを交渉していく様子を明らかにした. しかし, 留学経験は多様であり, それに応じて留学経験者たちが感じている帰国後のふるまいや言語使用はさまざまなものがあると考えられる. したがって, 今後は, 様々な国への留学経験者の語りを収集し, 留学経験者の実態を明らかにしていく.

**参考文献**


Beinhoff, B., & Rasinger, S. M. (2016). The future of identity research: Impact and new developments in sociolinguistics. In Preece, I. (Eds.). *The Routledge Handbook of Language and Identity*. Routledge, London. 572-585.

独立行政法人日本学生支援機構 (2024). 2022 年(令和 4)年度日本人学生留学生状況調査結果 https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2024/04/data2022n.pdf(閲覧日：2024 年 12 月 8 日)

Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.

飯野公一(2021). ポストコロナ時代の留学 多元化するつなぎ方, つながり方 杉野俊子(監修)野沢恵美子・田中富士美(編)(2021)「つながる」ための言語教育　アフターコロナのことばと社会 明石書店 pp. 266-278.

岩崎典子 (2018). 「ハーフ」の学生の日本留学　言語ポートレートが示すアイデンティティ変容とライフストーリー 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編)(2018). 移動と言葉 くろしお出版 pp. 16-38.

岩崎典子 (2022). 「留学」研究からことばの学習と使用を考える 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編)(2022). 移動と言葉２ くろしお出版 pp. 97-126.

岩田裕子・重光由加・村田泰美(2022). 社会言語学 基本からディスコース分析まで ひつじ書房

稲葉皐(2024). メディアに現れる留学経験者のステレオタイプ―YouTube と TikTok 上の動画を事例に― ことばと社会(3), 27-36.

Nwosu, C.(2022). Does study abroad affect student academic achievement?. In *British Educational Research Journal*, 48(1), 821-840.

八島智子 (2012). 外国語コミュニケーションの情意と動機: 研究と教育の視点 関西大学出版部

吉村紀子・中山峰治 (2010). 海外短期英語研修と第二言語習得 ひつじ書房


**トランスクリプト記号**

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1.0) | 1.0 秒の音声のない状態 | ↑ | 直前の発話の顕著なイントネーション上昇 |
| = | 途切れなく密着した会話 | h | 呼気音 |
| [ | 発話の重なりの開始 | .h | 吸気音 |
| ( ) | 聞き取り不可能な部分 | ¥¥ | 笑いながら発話 |
| : | 直前の音の引き延ばし. | @ | 笑い |
| . | 下降イントネーション | < > | ゆっくりとした発話 |
| , | 継続調イントネーション | (( )) | ジェスチャー等の非言語行動 |
| ? | 上昇イントネーション | | |